

復命書

2014年4月17日

新政会 代表
望月 厚司 様

議員名 佐藤成子

下記のとおり、政務活動費による視察を実施したので、ご報告します。

1 日 時	2014年4月12日（土）	
2 視 察 先	(1) 都 市 名 視 察 先 施 設 等	第19期女性のための政治スクール 会場：星陵会館（千代田区永田町） 10回シリーズ（今期は単発受講） 今回の大テーマ 『日本はどうなる—憲法・原発・社会保障—』
	(2) 対 応 者	同志社大学大学院ビジネス経営課教授 浜 矩子 氏 医療法人 社団実幸会 いらはら診療所理事長 苛原 実 氏
3 目 的	例年、全国から参加の地方議員（男性含む）との情報交換も含めて、各回著名な方々のタイムリーな講義聴いて、政策立案や総括質問など議員活動に生かすために参加。今回の憲法・予算・医療などの問題、その解決方法などを探っていければとの思いで、例年通り参加するつもりであったが、スケジュールが合わず単発の参加となったが、単発でも、意義あると思い参加する。	
4 内 容	(調査事項・調査結果を具体的に) 浜 矩子氏 『成熟を活かす社会』 成熟とは大人になること。 経済的成熟⇒①フローからストックへの変化 勢いとか流れるの意味の <u>フロー</u> は成長期 蓄積とか在庫の意味の <u>ストック</u> は豊かさ・富の蓄積期 ②①の上に <u>成長の世界から分配の世界へ</u> の変化	

※日本の経済は高度成長期は過ぎて蓄えの時代になっているのだが、まだまだ成長できる、かつてのバブルのころを見ている。自覚が足りない。

※かつての企業戦士の勢いはないが、世界に冠たる国富の国蓄えの国だ。経済が成熟している。

※一定の成熟度に達した経済社会に、さらに、成長する必要はない。成長は卒業したのだ。

※蓄えの経済は、蓄えを上手に分配することだ。

分配社会⇒上手くいかないと、格差経済が生じ、格差社会をつくることになる。

※落ちこぼされた人たちが増える⇒面倒を見てあげなければならない人が増える。その中で多くを取り残していけば⇒経済効率が上がらない⇒そこで、分配戦略が必要だ。

社会的成熟⇒大人になった社会。それは何を意味するか。子供と大人の違いは何か？子供にはできないことは何か？⇒大人は人の痛みがわかる。自分の痛みとしてわかる。成長していくことを通じて人の痛みがわかる。人の喜びを喜びとして受け止められる。人の成功をたたえることができる。洗練された大人。つまり、成熟社会とは、共感社会・共感度の高い社会。

※さて、経済の世界は、共感の世界から遠い・対峙する世界で、人情も人権も引っ込む世界だ。つまり、経済活動は人を痛みつけるもの？ではないはず。人間の営み、人間しかできない経済活動⇒人間を守るために、既成政治などによる枠組みが必要になる。

本源的に共感性のない経済活動を企業と呼んではいけない⇒ブラック企業

成熟を活かす社会⇒住人（住民ではなく）基本心得・掲げるべき愛言葉・うばいあい（市場占有率）からわかちあい（シェアビジネス）へ目指すべき場所・多様性と包摂性の社会構築。多様性の反対は均一性で、包摂性の反対は排除だ。⇒今私たちはどこにいるのか？

※行き詰まりを打開するための経済成長、財政のための経済成長ではないはずだ。精算メカニズムが必要だ。私たちは、成長の奴隷ではないはずだ。内部

留保への課税など財政再建こそ必要だ。

苛原 実氏 『時代が求める在宅医療』

ここ 20 年間在宅診療を苛原診療所として行っている。診療料の改定などが行われ、施設の訪問診察料が 4 分の 1 になった。医療計画策定に係わる国の指針が重要だ。医療機関の役割分担。大病院志向を変えること。在宅医療は、プライマリーケアの一環・医療提供手段で、外来治療の延長にある。機能強化型在宅療養支援が必要だ。地域包括ケアによる認知症患者の生活の質の向上を図っている。医療が動けば、地域も変わる。在宅医療が不可欠だ。入院している高齢者の退院調整⇒誰がどこへ移すか？⇒ソーシャルワーカーやケアマネージャーが本人の年金や社会保険、介護保険などを鑑み決定される。在宅はやはり生活支援など家族の手が必要だ。横浜市などは、福祉職として、ソーシャルワーカーを採用している。又、ハウスメーカーも医療を考え出している。住む環境、建築業のマインドが問われる。在宅医療にシフトしている中、生活確保・医療確保が課題になる。今後診療報酬との兼ね合わせての検討が必要だ。

5 成果・市政への反映等

浜さんの話は歯に衣着せぬ話し方で、共感できた。社会が大人になるということは、奪い合いから分かち合いの世界になることだの説明は、納得できることだ。このところ、地域の要望に対して、当局は、お金がないの一点張りで、なかなか思うように進まない。もちろんその地元の人たちにとっては深刻な要望ではあるので、何とか実現できないものかと思案する。がしかし、待てよ。これまでのプラス享受ばかりではなくマイナスの方もみんなで享受していかなければ、行政自体が先行き成り立たなくなる可能性が出てきたということかもしれない。受けることだけではなく、自分たちの力を出していかなければならないのだと感じた。社会の実態を皆で受け入れる・共感して、いいことばかりではなく、やってもらえばかりではなく、自ら動くことで、みんなで痛みを分かち合いたいと感じた。他人の痛みの分かり合える社会・静岡。大人の都市静岡をつくっていかなければならないと痛感。経済活動と対峙するこの現象をどれ程広げていけるか課題だ。

在宅診療については、国の方針のベクトルがその方向であるのは分かっているが、そのための様々な対応策が後手後手では困る。ケアマネージャーシステムの充実や、横浜市のような福祉専門職職員採用を進めるべきだ。